

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(ただし、一部を省略したり、書きかえたりしたところがあります。)

見えない人と見える人では、感覚の使い方がどのように違うのでしょうか。

見えない人は視覚を使って知覚することはできません。では、見える人の感覚全体から視覚を差し引くと見えない人になるのか？ もちろんそんなことはありません。そこには「三本の脚の椅子だからこの立ち方の論理」があります。つまり、聴覚など視覚以外の感覚の使い方が、見える人と見えない人では違っているのです。

タンジュン^aに言ってしまったえば、見えない人の場合は、視覚以外の感覚をフルに使って、視覚の欠如^bをオギナ^cっている、ということになります。でも、そう言ってしまうのもちよつと違う気がする。見えない人の感覚の使い方を体感していくと、どうも「見る」ということについての私たちの理解の方が、ずいぶんと狭く、柔軟性に欠けたものだのだ、ということに気づかされます。

視覚とは、そもそももつと多様で流動的なものではないか。見るために、本当に目は必要なのか。見えない人の「見方」に迫ることで、本章では、視覚についての考え方、身体についての考え方をぐつと拡張してみたいと思います。

見えない人には、特別な聴覚や触覚が備わっている。音だけで状況を理解するフシギな耳。微妙な質感の違いを触り分ける特別な手。彼らの感覚は、見える人のそれとは全く別のものなのだ――。「見えない人の感覚」と聞いて、そんなイメージを持つ人は多いのではないのでしょうか。

ここではまず、この見える人が抱きがちなイメージを疑うところから始めたいと思います。見えない人は、本当に「特別な聴覚や触覚を持っている人」なのでしょうか。

確かに彼らは、ある意味ではすぐれた聴覚や触覚の持ち主です。先天的(厳密には、小さいときは見えていたが、その記憶を持っていない)全盲の白鳥健二さんは、聴覚を存分に働かせ、お湯が沸く音やドアが閉まる音、声の反響具合によって、自分が今いる場所についての情報を把握しています。ポットの方向、部屋の広さ、家具の位置、窓が開いているかどうか、カーテンが閉まっているか等々、ちよつとした音を手がかりに部屋のイメージを頭の中に作り上げます。

他にも、「声によって友達がお化粧をしているかどうか分かる」という人も。お化粧をしていると、「声のハリ」が違うのでしょうか。見えない人にとって声は相手の性格や気分を知る重要な要素ですので、ひとことその声を聞いただけで惚れてしまう、なんていうこともあるそうです。「面食い」ならぬ、「声食い」というわけですね。いやいや、声よりも足音のほうがその人のことが分かる、という人もいます。イケてる足音……自信に満ちたタヨれる足音ということでしょうか……。

また、ベン・アンダーウッドという黒人の少年は、常に舌打ちをしつづけ、その反響音で空間を把握することで知られています。「反響定位」と呼ばれるこうした認識法は、通常はイルカやコウモリの能力とされていますが、彼はこの方法を駆使してスケボーやバスケットを楽しんでいます。

あるいは、広瀬浩二郎さんは、自分の研究室にある壁一面の本の中から、背表紙の感触で目当てのタイトルを探し出すことができます。週一度サポートに来るスタッフがなかなか見つけれなかった本を、広瀬さんは目を使わずに探し出した。わあ、すごい！ 見えない人の触覚はさすがに違うね！ そんな話になるのも無理のないことかもしれません。

そう、確かに見えない人は、聴覚や触覚といった視覚以外の感覚をセツキョク的に用いています。見える人が使っていないような仕方です、それを使っているのも事実。したがって、まずはその違いを認識しておくことは大事です。

でも、違いを認めることと、特別視することは違います。「視覚障害者はすごい！」と誉めているんだから、特別視するのはいいことじゃないか、と思われるかもしれませんが、ところが、こうした態度は二つの点で問題をはらんでいます。以下にあげる二つの問題は、私が考えたことではなくて、見えない人から直接聞いた、つまり彼らが実際に感じている違和感です。

まず、ひとつめの問題は、^②「すごい！」という驚嘆の背後には、見えない人を劣った存在とみなす蔑みの目線があることです。「すごい」はたんなる「すごい」ではなくて、実は「見えないのにすごい」ということなのです。

もちろん、「すごい！」と言った人は、蔑むような意図などまるつきりなしにそう言ったはずですが、でも、無意識のレベルで「見えない人は見える人に行きかたがたではないはずだ」と考えていることを、見えない人は感じとっています。

本棚から本を探し当てることは、見えている人にとっては「当たり前」の行為です。しかし、見えない人にとっても、それは同じように「当たり前」のことなのです。自分にとって当たり前のことを「すごい」と言われたら、誰だって「おいおい。ナメないでくれよ」となるでしょう。

だから私は、「すごい！」ではなく「面白い！」と言うようにしています。本を探し当てるという同じ目的に対して、自分とは全然違う※1アプローチでそれを達成しているのですから。「へえ、そんなやり方もあるのか！」というヒラメキを得たような感触。「面白い」の立場にたつことで、お互いの違いについて対等に語り合えるような気がしています。

③ 特別視がもたらす問題の二つめは、見えない人のイメージを固定してしまうことです。道を歩くことひとつとっても、聞こえてくる音をたよりにする人、杖と足の裏の感触から情報を得る人、頬にあたる風を手がかりにして曲がるべき角やエレベーターホールの位置を把握する人など、その手法はさまざまです。

同じ触覚を利用する人でも、きわめて慎重に進む「を叩いて渡る」タイプの人もいます。駅などで壁に向かって行く人を見ると「危ないですよ」と声を掛けたりしますが、彼らはぶつかること、対象を知覚しているわけです。

そう、私たちはつい「見えない人」とひとくくりにしてしまいがちですが、実はその生き方、感覚の使い方は多様なのです。「見えない人は聴覚や触覚がすぐれている」という特別視は、この多様性を覆い隠してしまうことになりかねません。

※₂ 木下さんは「ぼくはポットの位置なんか分からないよ」と笑いながら言いますし、そもそも感覚なんか研ぎすまさずに「どんどん人に聞く」というのも一つの認識の方法です。こうした多様性を無視して、「見えないということは触覚がすぐれているんですね」という態度で最初から接したら、「すごい」と称賛したつもりが逆に相手にプレッシャーを与えてしまいかねません。

特別視は、遠ざけることにつながります。見えない人を、むしろ「友達」や「近所の住人」のように身近に感じる方法をさぐる必要があります。そうすることで、社会の共同運営者としてつきあうような関係を作り出したいと願っています。

〔注〕 ※1 「アプローチ」：対象に接近すること。または接近する方法。

※2 「木下さん」：生まれつき弱視で、十六歳のときに失明した。現在は全盲の人。

問一 波線部 a ～ e のカタカナを漢字に直しなさい。

a タンジュン b オギナ(つて) c フシギ d タヨ(れる) e セツキョク(的)

問二 「を叩いて渡る」とは、非常に用心深く物事を行う意味の慣用句です。に当てはまる言葉を漢字二字で答えなさい。

問三 傍線部①「この見える人が抱きがちなイメージ」について、筆者はどのように考えていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見える人が抱きがちなイメージに合う具体例を挙げることによって、イメージが適切であると考えている。

イ 見える人が抱きがちなイメージに反するイメージを示して、どちらのイメージもまちがっていると考えている。

ウ 見える人が抱きがちなイメージに合う具体例を挙げてはいるが、そのイメージは十分ではないと考えている。

エ 見える人が抱きがちなイメージに合う具体例がないということを示し、このイメージが誤りであると考えている。

問四 傍線部②「『すごい!』という驚嘆の背後には、見えない人を劣った存在とみなす蔑みの目線がある」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言った本人はほめているつもりでも、「すごい!」ということばの背景には、自分は相手より優れた存在だという気持ちがあるということ。

イ 言った本人はほめているつもりもなく、「すごい!」ということばの背景には、見えない人ができることに對する皮肉の気持ちがあるということ。

ウ 「すごい!」ということばの背景には、見えない人が見える人以上にできることに對して、尊敬する気持ちがあるということ。

エ 「すごい!」ということばの背景には、見えない人が見える人と同じようにできることに對して、悔しく思う気持ちがあるということ。

問五 傍線部③「特別視がもたらす問題の二つめは、見えない人のイメージを固定してしまうことです」とありますが、なぜ「見えない人のイメージを固定」することが「問題」なのですか。その理由を説明しなさい。

問六 本文において、筆者は「特別視」についてどのように考えていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見える人が見えない人のことを理解するためには、お互いの違いをみとめ、そのうえで見えない人が身につけた感覚の使い方をほめたうえで、彼らを特別視する必要がある。

イ 見える人が見えない人との違いを認めることと、見えない人を特別視することとは違うことであり、特別視は見えない人との間に距離を生むことにつながる。

ウ 見えない人にとって当たり前のことを見える人が特別視することは、見えない人を遠ざけることにつながり、見えない人の持つ多様性がかえって目立ってしまう。

エ 見えない人を「友達」や「近所の住人」のように身近な存在として受け入れるためには、私たちは見えない人を特別視して、彼らが生活しやすくなるよう工夫する必要がある。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、分りにくいと思われる方言には、意味を付しています。

四校時は、音楽の時間であった。

音楽の相沢先生は、小柄なのに大きく見える。化粧をしているのか、していないのか、分からない。たぶん姉ちゃんの化粧の仕方と同じなのだろう、と良介は推測している。白粉気もなく、口紅の毒々しさもない。髪は無造作に後ろで束ねている。ほとんどの場合、スラックス姿で、動作にめりはりがあって、いいリズムを発揮している。女子にはもちろんのこと、男子の生徒にも人気がある。大学を出て二年目とか、本土の人である。授業中はもちろん、ふだんも島のことばは使わない。きびきびした標準語である。この標準語が美しければ美しいほど、良介には、^①どこか嘘言めいて聞こえる。

彰は、おちつきがなかった。ズボンのポケットばかり気にしていた。

「前川君、どうしたの？」

相沢先生がとがめた。

「彰君、出ていらつしやい。」

先生はピアノを離れ、教卓の前に移って、彰を呼び出した。

「さあ、その手をポケットから出して、中のものを、ここに出してごらん。」

彰は、心配そうに先生を見上げた。

^②「先生、出してもよいか？」

「ええ、いいわよ。それ、出さないと、あなたは何も聞けないでいるでしょ。さ、出してごらん。」

彰は、ちよつと出し渋っていた。そして、先生がどうしても出させたいのだと知って決心したふうで、左手を出して教卓の上でひろげた。十センチほどの、クチナワ（蛇）である。

クチナワは、教卓の上から先生を見上げた。

先生は、まっ青になり、何か訳のわからぬことを唇の端からもらし、くずれるように倒れてしまった。死んだように動かない。

女子が、二、三人、泣き叫びながら、教室を走り出た。

副委員長の多恵子さんは、気丈だった。

「この、ばか！」

彰の面をひっぱたいて、医者の子らしく、先生の傍に膝をつき、すぐに脈を診た。

そこへ、担任の篠田先生が、注進に走った女の子よりも早く飛びこんできた。そして、相沢先生を抱き上げて、保健室へ運んで行った。

相沢先生は、目をつぶった青白い顔を、篠田先生の腕から垂らして、揺られて行く。

「あんた、なんちゅうこつばすつとね。」

「いっちゃん好かん。」

女子の総攻撃を一身に浴びて、彰は、青い顔でつつ立ったまま、動かない。ポケットに入れた手が、震えている。

「アキ。」

と、良介が声をかけると、彰は教室を走り出ようとした。

「おとつとつと！」

教頭先生が、彰とぶつかりそうになって、彰を抱きとめた。

教頭先生が来て、^③音楽室は静かになった。

みんなが、彰の「おしおき」を期待していた。彰も、覚悟して、うなだれている。良介は、彰の弁護をしようと、腹に力を入れた。

「クチナワ持つち来たとは誰か。」

教頭先生が訊いた。みんなが彰を見た。

「お前か。どら、見せちみろ。」

教頭先生は、彰の出したクチナワを掌に入れて、

「ほう、ほう。かわいか、かわいか。」

と、ガキのような顔をした。

「いやあ！」

と、^④女の子たちが、非難の声を上げた。

「うん。好かん者は、好かんね。先生もね、小学生のとき、こいば持つち行つち、いっちよん好かん先生の教科書の上に出したこつのあるとたい。えろう叱^{しか}られてね、何発ビンタくらうたか知れんばい。」
だよ ひどく くらったかわからないよ
これを持つて行つて

男子が笑った。

「ところで、前川、お前、相沢先生は好かんけん、こんクチナワば出したとか。」
を好きではないので この 出したのか

「うんにや。相沢先生はやさしかけん、好いちよる。」
やさしいので 好きだ

「好いちよるとに、なんでまた出したとや。」

「うん。……あんね、先生の、ポケットん中んもんば出せ、ち言わしたと。」
の中のを とおっしゃったの

「ああ、そうか。そいで出したとか。」
それで

「出しちよかですか、ち、俺^{おれ}は、先生に聞いちから出したとに……、先生は死んでしもうち……。」「
出して良いですか と 死んでしまった

言いながら、彰は、しゃくりあげ、とうとう声を上げて泣いた。

「こら、泣くな。先生は死んじやおらん。ちよつと気絶しただけたい。ばつてん、こいから、こんげなもんは、学校にや持つちくるな。気絶するぐれえ、好かん者は好かんとしやけん。」
好きじやないのだから だよ しかし これから こんなものは

教頭先生が話しているところへ、相沢先生が、戻^{もど}ってきた。もう、しゃんとしていたけれど、まだ顔色は青い。

「おお、もう良かですか。」

問いかける教頭先生の掌の中を見て、相沢先生は後退^{あとずさ}りした。

「おつと、こりやあいかん。いやあ、かわいかもんですたい。生き物は、赤ちゃんのときが、いちばんかわいか。」
かわいいものですよ

それから、教頭先生は、彰を向いて、

「おい、彰、こん子は、山に戻^{もど}しちよくぞ。」
この ておくぞ

^⑤そう言つて、「よし、よし」とクチナワを撫^なでながら、音楽室を出て行つた。

「先生、かんにん。」

彰が、泣いた名残^{なごり}の声で、詫^わびた。

「うん。先生も、かんにんな。……よう知りもせんで、ポケットん中んもん出せ出せ言うち、出されたもん見ち、ひつくりかえつちしもうた。」
言つて 見て

ああ、はずかしか。……な、みんな、こん事^{こと}あ、誰^{だれ}にも言わんとぞ。良かね。言うたら、嫁^{よめ}に貰^{もら}い手のなかごとなるけん。な、言わんとぞ。」
言わないのよ いいね ないようになるので

相沢先生の笑顔^{えがお}に、いつもの精気が戻^{もど}っていた。みんなも、笑い声をあげて拍手した。先生の島ことばは、どこかが少し違^{ちが}うという感じはあつたけれど、良介には、^⑥先生の一所懸命^{いっしょけんめい}な気持ち^{きもち}がじかに伝わ^{つた}ってきて、力一杯^{ちからいっぱい}拍手した。

—— 彰が、泣いた。

—— あの彰が、や？

噂^{うわさ}は、さつとひろまったらしい。

良介も、彰が泣くのを見たのは、はじめてであつた。びつくりしたけれど、赤ん坊^{ぼう}のように盛大に泣いた彰を、^⑦前よりいっそう好きになつた。

(豊永徳『椎の葉の鳴る里』)

問一 傍線部①「どこか嘘言めいて聞こえる」とありますが、なぜそのように聞こえるのですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。なお、「嘘言」とは「うそ」という意味です。

ア ふだん自分たちが使用している言葉とかけ離れているため、なんとなく現実感が感じられないから。
イ きれいな言葉で人を油断させておいて、だまそうとするのが詐欺師の手口だと本で読んでいたから。

ウ 本土から来た人なので、島を馬鹿にして島ことばを使わないのではないかと、反発を覚えているから。

エ 美しい標準語を聞かされると、自分たちが使っている島ことばが恥ずかしくなってしまうから。

問二 傍線部②「先生、出してもよか？」と聞いたのはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 許可を取ることで、後で何が起きても自分の責任ではないとはつきりさせたいから。

イ 先生が苦手としている生き物を、本当に出してもよいものか、ためらったから。

ウ もったいをつけることで、蛇を出したときの、先生を驚かせる効果を高めたいから。

エ 蛇を出すことで、本土から来た先生をびっくりさせるのではないかと気をつかったから。

問三 傍線部③「音楽室は静かになった」とありますが、その時の状況の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 彰が蛇を出したことで相沢先生が倒れ、音楽の授業が中断されてしまった事態を、教頭先生がどのように解決してくれるだろうかとクラスの皆が緊張している状況。

イ 彰が蛇を出したことで相沢先生が倒れ、自分たちが大騒ぎしたことで、他のクラスに大迷惑をかけたことを教頭先生から叱られることをクラスの皆が覚悟している状況。

ウ 彰が蛇を出したことで相沢先生が倒れるという大変な出来事に対して、教頭先生が彰を厳しく叱るだろうとクラスの皆が予想している状況。

エ 彰が蛇を出したことで相沢先生が倒れるという大変な出来事に対して、どうすればよいのかを教頭先生がクラスの皆に教えてくれるはずだと期待している状況。

問四 傍線部④「女の子たちが、非難の声を上げた」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相沢先生の心配をするよりも蛇を見て喜ぶという、学校の先生とは思えない言動に、いっぺんに不信感が募ったから。

イ 自分たちの大好きな相沢先生を倒れさせることとなった蛇を「かわいか」と言うのでは、蛇が悪いのだということにならないから。

ウ 蛇を「かわいか」と言うことで、このかわいい蛇を見て倒れた相沢先生の方がおかしいのだと言っているように感じられたから。

エ 蛇を「かわいか」と評することに嫌悪感を覚えるとともに、その言葉で彰への共感を示しているように思われたから。

問五 傍線部⑤「そう言って、『よし、よし』とクチナワを撫でながら、音楽室を出て行った」とありますが、「教頭先生」はどのような人物として描かれていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何よりも生き物が好きで、機会があれば生き物を通して子どもたちに命の大切さを教えることができる人物。

イ むやみに子どもを叱ることなく、子どもの言葉や気持ちをよく受けとめて、どう行動すべきかを示すことのできる人物。

ウ いたずらが好きな性格が変わることなく、すぐに子どもに戻ってしまうような、いつまでも子どもの心を持ち続けている人物。

エ 何か事件があったときには、常に子どもの側に立って、大人の勝手な決めつけから子どもを守ろうとする人物。

問六 傍線部⑥「先生の一所懸命な気持ち」とありますが、どのような「気持ち」ですか。わかりやすく説明しなさい。

問七 傍線部⑦「前よりいっそう好きになった」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 泣くことなど考えられない彰が、いつもと違って弱い部分をさらけ出したのを見て、彰に対する親しみが増したから。

イ 彰は強くて憧れの存在だったが、自分と同じように泣くこともあるのだと知って、対等の存在だと思ったから。

ウ 彰が相沢先生に心から謝って涙を流したのを見て、彰の心根の強さだけでなく優しさや美しさを知ったから。

エ 彰のやんちゃなところが好きだったが、いたずらを叱られて大声で泣くところを見て、彰の素直さに触れたように思ったから。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

どこで読んだのか思い出せないので具合が悪いのだが、当今のものの考え方は、病人を基準にしすぎる、というような意見があつて、そのとおりだと思つた。

心臓病の人にスポーツは有害だろうが、元気な者までソロソロ歩くことはない。胃の病人にいけないからといって、みんなでステーキを我慢することはしない。

むしろ多くの場合、病人と元気な者とは、やるべきことが逆なのだ。元気な者はスポーツをやったほうがいいし、ステーキは食べたほうがいいし、ベッドに寝てばかりいないほうがいいし、流動食ばかり食べてはいけけないのである。

ところが子供のことにしても、家庭のことにしても、その「病んだ部分」をとおして、すべきこと、してはならないことを論じすぎるといふのだ。

こんないい意見の出典を忘れる、というのは、まさしく私の「病んだ部分」で、それはそれで治療と反省を要するが、「子供もつと対話の時間を持つべきだ」というような教育論を読むと、^①上述の意見を思い出し、「子供によるよなあ」と思つてしまうのである。

^②たしかに世の中には「対話」を必要とする子供もいるだろう。しかし、それは少数なのではないか。多数の子供は、親との「対話」など必要としないのではないか。そんなふうに見えてならない。

私もかつて一個の子供であつたが、親との「対話」など別にのぞまなかつたように思う。もし親のほう「対話」をしかけてきたら、照れくさいような、^X歯の浮くような気持ち^Yがしただろう。少なくとも、中学生あたりからは、そうであつた。私は特別反抗的な子供ではなかつたが、親と「対話」などしたつて、本当の話はできない、とごく自然に承知していたように思う。

といつて、親とのつながりを、まったくのぞんでいなかつたわけではない。しかし、それは「対話」などという正面きつたものではなく、言葉としてはほとんど意味をなさないような交流があれば、充分^{じゅうぶん}だつた。つまり、家の中で顔を合せて、黙^{だま}つて顔をそむけられては、どこかで寂^{さび}しいような見捨てられたような気持ちがしたが、「お」「へへ」ぐらいのやりとりがあれば、気持ちは安定していたのである。

それ以上親が気をつかつて「このごろ音楽はどんなもんがはやってるんだ？」などと聞いてきたら、無理してるなあ、と思ひ、そんな必要のないなあ、と思ひ、答えるのがすごく億劫^{おくせう}だつたらう、と思ひ。

親とは通じない部分を、どんどん持つことによって、子供は自分の世界をつくつていくのである。不分明なところが多いから、といつて親が不安におちいることはない、と思ひ。「なにを考へているか、なにをしているか分らない」部分が増えていくことで、子供は成長しているのだ。そこへ、いちいち親が首をつっこみ「一緒に悩^{なや}み、一緒に考へよう」などとすることは、子供にとっては、ひどくわずらわしいことだし、親が加わることで当面の局面はいい方向へ転換^{てんかん}するとしても、長い目で見れば、あまりいい影響^{えいきやう}を残さない、というように思ひ。

「やつぱりお母さんに打ち明けてよかつたと思ひましょう。大人はやつぱり、長く生きてきただけのことはあるんだから」と、処世的な知恵^{ちえ}で子供を屈服^{くつぷく}させ「交流」を果たしたと思ひてはならない、と思ひ。

^④では、どうしたらいいか、というところ、原則的には親は子供の内面については、ほつておくしかないのだ。理解しようとしたり、^{※1}いいわんや共感しようとしたり一緒に悩もうとしたりしてもむだなのだと思ひ。

子供との距離^{きょり}が、刻々ひらいていくことに堪^たえるしかないのだ。そして、その距離をリアルにとらえている親は、子供にとって魅力的^{みりょくてき}だと思ひ。

そうした親は、子供を理解しようとしたり、一緒に悩もうとしたりしない。そういうことができないことの悲しさ、寂しさ、情けなさを胸におさめて、子供と対する。いわば「他人」として対する。「親切な他人」として対する。そして、その節度を保てるということが、子供への愛情になつていく。というような親でありたい、と少なくとも私は思ひている。

だから文句をいう時も、子供の気持ちをいろいろに推測して、「親らしく」いい方を工夫^{くふう}するというような操作を、なるべくすまい、と思ひ。感じたことや、考へたことや、怒^{いか}りや口惜^{くちお}しさを、加工しないで子供にぶつけない、と思ひている。

子供が刻々自分の世界をつくつて親からはなれようとするのに負けないで、親の私も自分の世界を子供の前に提示して、その世界をまもりたい、と思ひ。子供は、寂しい思いをするかもしれないが、そういう寂しさは、「理解しよう、共感しよう」として立ち入ってくる親が与^{あた}えるやりにきれなさより、はるかに子供のためになる、と思ひ。

「分りつこないはずの」ロックを分ろうとして子供に近づいていく親よりも、子供が^Y鼻もひつかけない^{※2}浪花節^{ななわふし}の細かな味を愛して、そのレコードを子供にさわらせない、というような親のほうが、私には子供にいい影響を与えるというように思ひ。

必要なのは対話ではなく、子供の前に、どんな人間として立ち現れているか、だと思う。

実をいえば、私と父との関係がそのようなものであった。父は私の内面を※3「付度」したり、理解しようとしたりしなかった。私も理解してもらいたい、と思わなかったし、歩み寄ってほしいなどは少しも思わなかった。といって冷たいわけではなく、朝、顔が合えば「いい天気だな」というようなことはいつてくれた。こつちも「うん」などといった。それだけであった。

そして父は、一人の男として一所懸命だっただけで自分勝手だっただけで生きていた。いわゆる「対話」はなかったが、父を追憶してみると、私は父の影響を大きく受けているのであった。^⑤その意味では、対話はあったというべきなのかもしれない。

で、そんな親になろうと努めているのである。だから子供には、ちよつと冷たい親と思われるかもしれない。それでいいと思っている。しかし、子供が「病んだ」場合は別である。その時は、まったく反対の親にならなければならないのかもしれない。そのあたりの区別を、教育論はもつとはつきりしなければいけない、というようなことを思っている。

(山田太一『路上のボールペン』)

〔注〕※1「いわんや」……(以下のことは)いうまでもなく。なおさら。」という意味の副詞。

※2「浪花節」……江戸末期に大阪で成立した三味線を伴奏とする語り物。義理人情を主題とするものが多い。

※3「付度」……他人の気持ちをおしはかること。

問一 波線部X「歯の浮くような気持ち」・Y「鼻もひっかけない」の本文における意味として最も適当なものを次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---------------|-----------------|--|-------------|-------------|
| X「歯の浮くような気持ち」 | | | Y「鼻もひっかけない」 | |
| ア | 馬鹿にされていくやしい気持ち | | ア | あまり感心しない |
| イ | まつすぎで恥ずかしい気持ち | | イ | にくにくしげにあつかう |
| ウ | みとめてくれてほこらしい気持ち | | ウ | よく知らない |
| エ | きげん取りのようでない気持ち | | エ | まったく相手にしない |

問二 傍線部①「上述の意見」とはどのような意見ですか。次の解答形式に合うように、本文中から二十字程度で抜き出して答えなさい。(読点を含む。)

という意見。

問三 傍線部②「たしかに世の中には『対話』を必要とする子供もいるだろう」とありますが、『対話』を必要とする子供」とはどのような子供ですか。簡潔に答えなさい。

問四 傍線部③「親と『対話』などしたって、本当の話はできない」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 面と向かって話すよりも、あいさつ程度の軽いやりとりの方が真実が伝わりやすいから。
- イ 面と向かって話しても、自分の興味のある世界をうまく親に話せる自信がないから。
- ウ 面と向かって話しても、自分が作りつつある世界を親には理解できるはずがないから。
- エ 面と向かって話しても、人生経験の豊富な親にすぐに言いくるめられてしまうから。

問五 傍線部④「では、どうしたらいいか、という」と、原則的には親は子供の内面については、ほっておくしかないのだ」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子供は年頃になると自分の世界を作って親から離れていくので、親がいちいち口出することは成長のさまたげになるから。
- イ 子供は年頃になると自分の世界を作って親から離れていくものとわかり、親は自分から離れたがる子供を受け入れられないから。
- ウ 子供は年頃になると自分の世界を作って親から離れていくものと経験的に知っているので、親はむだをはぶこうとするから。
- エ 子供は年頃になると自分の世界を作って親から離れていくもので、親は寂しいような見捨てられたような気がするから。

問六 傍線部⑤「その意味では、対話はあった」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 向かい合ってことばを交わす機会はなくとも、濃密な家庭環境の中で「私」が自然に成長していたということ。
- イ 向かい合ってことばを交わす機会はなくとも、男としての父の生き方から「私」が大きな影響を受けたということ。
- ウ 向かい合ってことばを交わす機会はなくとも、「私」が若い頃の父親の性格そっくりになってきているということ。
- エ 向かい合ってことばを交わす機会はなくとも、直接心から心へとお互いに良い影響を与え合っていたということ。

問七 筆者の目指す父親像とはどのようなものですか。本文全体をふまえて説明しなさい。

受験番号の記入欄は左端にあるので、忘れないこと。

		一
	a	
	b	
	(つて)	
	c	
	d	
	(れる)	
	e	
	(的)	

六	五		四	三	二	一
						a
						b
						(つて)
						c
						d
						(れる)
						e
						(的)

[illegible][illegible]

受驗番号